JADS
JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY
アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会
第 35 回（2024 年度）年次大会　予稿集

2024 年 6 月 15 日（土）・16 日（日）
東京都写真美術館 1 階ホール及びオンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会　第35回（2024年度）年次大会
プログラム・目次

【第１日目】
２０２４年6月１５日（土）　　１３：００－１７：３０

13:00－　開会挨拶　　田良島 哲（アート・ドキュメンテーション学会会長）

【シンポジウム】 写真文化の継承と資料・記録の保存活用　　13:10－16:30　　p.5

13:10－　［趣旨説明］　田良島 哲（東京文化財研究所 客員研究員）

13:20－　［報告 1］　吉田 成（東京工芸大学 名誉教授）
写真の誕生と収集・展示・保存

14:10－　［報告 2］　髙村達（公益社団法人日本写真家協会 副会長、日本写真保存センター 代表）
高村智恵子紙絵にみる原板アーカイブの意義

［報告 3］　寺師太郎（公益社団法人日本写真家協会 理事）
日本写真保存センターの活動、収集と利活用のこれから

15:00－15:10　　休憩

15:10－　［報告４］　井上 聡（東京大学史料編纂所・画像史料解析センター（兼任） 准教授）
桑田 恵里（東京大学史料編纂所・史料保存技術室（写真担当） 技術職員）
古写真調査を事例とした歴史史料撮影における新展開と組織的データ管理体制の今後

16:00－16:30　　パネルディスカッション・質疑応答
進行：田良島 哲

【第18回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・奨励賞授賞式】16:40－17:30　　p.7

【懇親会】17:30－（大会１日目終了後）
会場：フロムトップ（東京都写真美術館内）

【第２日目】

２０２４年6月１６日（日）　１０：００－１７：００

【学会総会】　１０：００－１２：００　（会員限定）

*オンライン参加のみ。現地では Wi-Fi 利用可、電源供給はありません。

【研究発表会】　１３：００－１５：４０　（発表２５分　質疑５分）　p.8

13:00 – 13:30　［発表１］福井 久美子（東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京）
小林 愛恵（東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京）
瀬賀 未久（株式会社 gluon）
収蔵品の利活用に向けた 3D データ公開――3D Digital Archive Project
p.10

13:30 – 14:00　［発表２］矢部 恵子（京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻）
平沢貞通――４つの雅号をもつ画家の矜持
p.12

14:00 – 14:30　［発表３］矢野 浩二朗（大阪工業大学情報科学部）
横山 恵理（大阪工業大学情報科学部）
おしゃべり源氏物語
――生成 AI を用いた博物館ガイドの開発と実運用からの学び
p.14

14:40 – 15:10　［発表４］新里 直之（京都芸術大学舞台芸術研究センター）
民間小劇場におけるアーカイブ構築の意義
p.16

15:10 – 15:40　［発表５］赤間 亮（立命館大学アート・リサーチセンター）
新名 佐知子（秩父宮記念スポーツ博物館）
村上 佳奈子（秩父宮記念スポーツ博物館）
マルチモーダル型データベースによる複雑化した収蔵品管理情報の統合手法
――秩父宮記念スポーツ博物館を事例に
p.18

15:40 – 16:00　休憩

【第２日目】
２０２４年6月１６日（日）

【活動紹介】　　１６：００－１６：２０

［活動紹介１］松本 圭子（京都国立近代美術館）
京都国立近代美術館情報資料室について　p.20

［活動紹介２］富澤 洋子（ポーラ文化研究所）
2024 年 5 月「化粧文化ギャラリー」オープン
～リアル×デジタルで化粧文化をもっと身近に～　p.20

［活動紹介３］学会アーカイブ SIG（アート・ドキュメンテーション学会）
JADS Archives and Archival Methods SIG
（学会アーカイブ SIG）の活動――2023 年度　p.21

【動向紹介】　　１６：２０－１６：５０

［動向紹介］　井上 奈智（上田女子短期大学 専任講師）
AI と著作権の状況整理　p.22

16:50 – 17:00　　**閉会挨拶**　　本間 友（アート・ドキュメンテーション学会 幹事長）

『アート・ドキュメンテーション研究』第 33 号　原稿募集　p.23
アート・ドキュメンテーション学会　入会のご案内　p.24

シンポジウム
「写真文化の継承と資料・記録の保存活用」
６月１５日（土）１３：１０ -１６：３０

一世紀半以上にわたって世界中で作成されてきた写真の文化的、社会的価値は、関係者の努力によって芸術作品や歴史資料としての意義については広く認知が進んできた。一方、作品や記録としての印画だけでなく、乾板、フィルムなどの写真原板や書籍などの二次的な成果物、さらに写真の制作に関連する器材等を含めた写真関連資料の蓄積は厖大だが、21 世紀に入ってのデジタル画像の発達と普及によって、担い手の急速な世代交代が進んでおり、これまでの世代が築き上げた写真の文化と関連資料の継承については、多くの課題が生じている。

アート・ドキュメンテーション学会（JADS）は、記録の保存、管理、継承という学会の主旨から、2016 年度の大会でシンポジウム「文化財と写真～現物と複製 その境界を越えて～」を開催するなど、これまでも機会をとらえて、写真の美術的、歴史的価値の認識を深めるための活動を行ってきた。

今回、あらためて写真関連資料の保存に関する社会的な動きの現状を確認するとともに、その望ましい形での利活用による、今後の写真文化の継承を考えるために、写真家、研究者、実務家等による幅広い議論の機会を設けて、保存活用の理念や方法の深化を図り、併せて社会における認識を広げる一助としたい。

登壇者プロフィール（登壇順、敬称略）

田良島　哲（たらしま　さとし）
東京文化財研究所 客員研究員
京都府教育庁文化財保護課、文化庁美術学芸課を経て、2003 年から 2019 年まで東京国立博物館に勤務。「国立文化財機構所蔵品検索システム（ColBase）」の構築など、主に博物館における資料情報の管理と公開に従事した後、2020 年から 2023 年まで国立近現代建築資料館で建築資料アーカイブズの業務に携わった。
共編著に『東京国立博物館図版目録　中世古文書篇』（2014 年）、論文に「歴史的に見た博物館の目録」（『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』 2017 年）など。

吉田　成（よしだ　あきら）
東京工芸大学非常勤講師（名誉教授）・駒澤大学非常勤講師・写真家
日本大学大学院芸術学研究科文芸学専攻修士課程修了（芸術学修士）。東京大学史料編纂所史料保存技術室文部科学技官（写真担当）、東京工芸大学芸術学部写真学科助教授、教授を経て現職。1994 年度文化庁派遣芸術家在外研修員（１年派遣）として渡米し、ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真美術館において写真の保存について研修。共著『研究者のための資料写真の撮り方』（理工学社、1991 年）、共著『写真資料の保存』（日本図書館協会、2003 年）、写真集『残された原風景―東京、佃・月島界隈』（日本写真企画、2010 年）など。

【シンポジウム】

髙村　達（たかむら　とおる）
東京都文京区生まれ、日本大学芸術学部写真学科卒業後、広告代理店スタジオ勤務後、フリーランスフォトグラファーとして独立、髙村達写真事務所設立、主に、コマーシャル、スタジオ撮影の傍ら髙村光雲、光太郎、豊周、規の鑑定及び作品の撮影、フィルムデジタイズや創作活動も続ける。（公社）日本写真家協会副会長、日本写真保存センター代表、金沢美術工芸大学非常勤講師。

寺師　太郎（てらし　たろう）
フォトグラファー（TOPPAN 株式会社勤務）
日本大学芸術学部写真学科卒業。凸版印刷（株）入社後、ポスター、カタログ、カレンダーなどの撮影を手掛け、2000 年より北米先住民族の岩絵の調査をグラフィックデザイナ―粟津潔氏と始める。2011 年より国宝重文等の文化財デジタルアーカイブ業務に従事。（公社）日本写真家協会会員理事。共著書に『ロックアート－神話そしてイマジネーション』（フィル ムアート社、2002 年）。越後妻有トリエンナーレ参加（2003 年）。第 56 回全国カレンダー展文部科学大臣賞（2005 年）、第 57 回全国カレンダー展国立印刷局理事長賞 （2006 年）、第 37 回 Japan POP Festival 金賞（2008 年）、第 63 回全国カレンダー展 経済産業省情報政策局長賞（2011 年）、第 67 回全国カレンダー展 銀賞（2015 年）。

井上　聡（いのうえ　さとし）
東京大学史料編纂所　古文書・古記録部（画像史料解析センター兼任） 准教授
東京大学人文社会研究科博士課程中退。専門は日本中世史。1998 年史料編纂所助教。
史料編纂所編『日本荘園絵図聚影』（東京大学出版会）・同編『大日本古記録』（岩波）の編纂に従事。荘園絵図・中世古記録の編纂・研究の傍ら、編纂所史に関する史料整理・分析を進めている。画像史料解析センター「本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究プロジェクト」に参加し、所蔵乾板・印画紙の保存・活用にもあたっている。また編纂所が公開する「電子くずし字字典データベース」「花押データベース」「荘園絵図模本データベース」を主担する。

桑田　恵里（くわた　えり）
東京大学史料編纂所　史料保存技術室　技術職員
2015 年、日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。日本大学芸術学部写真学科助手、慶應義塾大学付属研究所斯道文庫複写担当職員を経て、2022 年より現職。歴史史料の撮影に従事するとともに、画像史料解析センター・古写真研究プロジェクトにおいて写真史料の調査、研究に参画する。写真技術の変遷に関心を持ち、プラチナ・プリントをはじめとする 19 世紀の古典的な写真印画技法の再現・制作にも取り組む。

※ 主催者からのお願い
会場、オンラインを問わず、シンポジウム開催中の写真撮影（スクリーショットを含む）、録画、録音はお断りします。

第 18 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞 授賞式

2024年6月15日
第18回 野上紘子記念アート･ドキュメンテーション学会賞･同奨励賞選考委員会

標記の賞について選考の結果、会員の皆様より推薦いただいた候補から「学会賞」2件（1機関と2名）、奨励賞評価委員会の推薦による候補から「奨励賞」1件の授賞を決定しました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

第18回 野上紘子記念アート･ドキュメンテーション学会賞･同奨励賞選考委員会
委員長:高橋晴子 委員:田良島哲、嘉村哲郎、黒田結花、本間友

第18回 野上紘子記念 アート･ドキュメンテーション学会賞

受 賞: **奈良文化財研究所 企画調整部 文化財情報研究室**

「全国遺跡報告総覧」以来の文化財情報の集約と公開の推進に対して

授賞理由:

奈良文化財研究所は、2008年度から実施された「全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクト」の成果を引き継いで、2015年に「全国遺跡報告総覧」をウェブ公開し、それまで閲覧の手段が限られていた文化財調査報告書類の利用の便宜を大きく改善した。それにとどまらず、文化財自体の地理情報をはじめとする各種データとの連携によって、文化財情報の可視化と可用性の大幅な拡大を実現した。

その後も全国の自治体や研究機関等の参画による継続的な情報の蓄積が進められるとともに、2023年12月には「全国文化財目録」を公開し、日本国内における文化財の所在状況を総合的に把握できる情報基盤の構築を進めている。これらの集約された情報は、学術研究、地域振興、文化財防災など多面的な活用が期待されるところで、その社会的意義はきわめて大きい。

以上の成果を評価し、第18回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を授与する。

受 賞: **住広 昭子 氏　中村 節子 氏**

美術館･博物館におけるライブラリー運営について、長年にわたり先駆的な役割を果たしたことに対して

授賞理由:

住広昭子氏は、奈良国立博物館勤務を経て、1980年に東京国立博物館に司書として着任し、同館資料館の開設準備に携わった。資料館開館以降は、図書資料を主とした資料の受け入れ、管理、閲覧公開業務について、長年、中心的な役割を果たした。この間、組織形態の変化や資料の増加などの課題に対処するとともに、博物館コレクションと図書資料情報の連携や、シーボルト寄贈本のネット公開など、博物館が時代に即応してゆく上での大きな成果を残した。

中村節子氏は、1993年にブリヂストン美術館（現・アーティゾン美術館）に着任し、同館図書室の運営体制の整備に尽力した。国内に先例のほとんどない中で、司書１名で学芸業務に対応するライブラリーとして、資料分類の確立や図書購入手続き、データベースの構築をはじめとする日常的な諸業務の基礎を築き、以後の美術館におけるライブラリーのあり方に大きな影響を与えた。同館カタログの文献目録や、展覧会の要所に出品された書籍や雑誌は、氏の長年の努力を反映している。

両氏はそれぞれ国立、私立と立場は異なるが、日本におけるミュージアムライブラリー構築の先駆者として、多くの課題に対処し、また後進に対する導き手として活動されてきた。本学会においては創設期からの会員、役員として会の発展に尽力された。

以上の成果を評価し、第18回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を授与する。

【学会賞の概要】
以下a)、b)、c)のいずれかに該当するものを選出する。対象は会員に限らない。
a) Museum、Library、Archivesをはじめとするアート･ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関。
b) アート･ドキュメンテーション分野の振興発展に寄与した功績が認められる者、あるいは機関。
c) アート･ドキュメンテーションに関わる論文･記事(学会誌『アート･ドキュメンテーション研究』、『アート･ドキュメンテーション通信』への掲載に限らない)、図書、展覧会、データベース、ウェブサイト等のなかから優れたもの。対象となる論文･記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

第18回 野上紘子記念 アート･ドキュメンテーション奨励賞

受 賞: **石井 淳 氏**

研究ノート「展覧会の包括的な情報モデルの検討」(『アート･ドキュメンテーション研究』第31号、2023年) に対して

授賞理由:

石井氏は本研究ノートにおいて、展覧会に関わり生産・流通・受容される情報を分類識別するための包括的な情報モデルを試作し、実際に開催された展覧会を対象にその適合性を評価・考察した。展覧会を構成する情報は非常に複合的であり、国内における研究は発展途上にある。複雑かつ重要な主題に正面から取り組まれたことを評価し、今後の研究の更なる発展に期待し、奨励賞を授与する。

【奨励賞の概要】
アート･ドキュメンテーション分野の発展における将来の貢献を奨励するため、本会が主催する研究発表会、シンポジウム、セミナー、ポスターセッション、活動紹介等で発表した登壇者、および『アート･ドキュメンテーション研究』に掲載された論文･記事の著者のなかから優れたものを選出する。対象は会員に限り、受賞年の前年度に発表、刊行されたものとする。

※第 19 回 野上紘子記念アート･ドキュメンテーション学会賞の推薦募集は、『アート･ドキュメンテーション通信』および学会ウェブサイト等で告知いたします。会員の皆様には、積極的なご推薦をお願い申し上げます。

【研究発表会】
６月１６日（日）　１３：００ -１５：４０　（発表２５分　質疑５分）

発表者プロフィール

福井　久美子（ふくい　くみこ）
東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京
多摩美術大学大学院情報デザイン領域、筑波大学大学院情報学学位プログラム修了。印刷会社の IT 部門にて、印刷物、ウェブ、TV などのメディアに対応したコンテンツを制作。2012年からギャラリーや博物館に勤務し、展覧会の企画から書籍の編集まで幅広い業務に携わる。現在、都立文化施設が有する収蔵品等の文化資源をデジタル化し、多様な形態での鑑賞体験を提供する「TOKYO スマート・カルチャー・プロジェクト」を統括している。

小林　愛恵（こばやし　まなえ）
東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京
東京学芸大学大学院美術教育専攻（美術史）修了。江戸東京博物館で常設展示室と企画展を担当し、展示や教育普及事業とともに音声ガイドの多言語化を推進。江戸東京たてもの園（特別展「大銭湯展」担当）を経て、江戸東京博物館資料係で収蔵資料情報のデジタル公開体制づくりを担う。現職では、デジタル化によるヒト･モノ･コトの新しいつながり方を創造すべく「TOKYO スマート･カルチャー･プロジェクト」に従事している。趣味は神輿担ぎ。

瀬賀　未久（せが　みく）
株式会社gluonディレクター／3D Digital Archive Project ディレクター
千葉大学都市環境システム学科卒業。ランドスケープ設計事務所を経た後、空間デザイン会社にて、ブランディングとプロモーションを軸に、イベント、エキシビション、インスタレーション、商空間開発を手掛ける。また、メディアアートの文化振興と人材育成にも力をいれており、都市×アート×テクノロジーを切り口に、クリエイティブを核にした企画開発に従事している。

矢部　恵子（やべ　けいこ）
京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士後期課程
京都芸術大学大学院芸術環境専攻芸術環境研究領域比較芸術学分野修了。団体職員を経て2020年、同大学院博士後期課程入学。京都芸術大学2022年度研究・制作・発表助成制度を得て「平沢貞通生誕130年・没後35年記念絵画展―『不朽』『三味二』『大暲』『光彩』―画家・平沢貞 通の生涯―」開催（2022年11月22日～12月3日、ギャラリーTEN／東京都文京区根津）。2023年2月、同展記録集発刊。主な論文「平沢貞通の『観照』による『地平線』を画題とした作品についての一考察」『京都芸術大学大学院紀要』3号、2022年。

矢野　浩二朗（やの　こうじろう）
大阪工業大学情報科学部　教授
千葉大学医学部医学科卒業。英国リバプール大学にて PhD（生理学）を取得。ケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジシニアリサーチフェローを経て、2011年から大阪工業大学情報科学部准教授、2024年より現職。専門は教育工学。特に VR、メタバース、生成 AI の教育への応用を研究している。共著書に『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』（ミネルヴァ書房、2013年）、『アクティブラーニング型授業としての反転授業［実践編］』（ナカニシヤ出版、2017年）他。

横山　恵理（よこやま　えり）
大阪工業大学情報科学部　准教授
奈良女子大学 大学院 博士後期課程 人間文化研究科 比較文化学専攻修了。博士（文学）。
2016年から大阪工業大学情報科学部特任講師、2024年より現職。専門は日本古典文学。特に「源氏物語享受史」に位置づけられる作品について研究している。共著書に『天文文化学序説―分野横断的にみる歴史と科学』（思文閣出版、2021年）、『狭衣物語 文学の斜行』（翰林書房、2017年）がある。

新里　直之（にいさと　なおゆき）
京都芸術大学舞台芸術研究センター　研究職員
京都芸術大学大学院芸術研究科博士課程単位取得満期退学。博士（学術）。2022年から現職。京都芸術大学芸術教養センター非常勤講師（2023-）、野上記念法政大学能楽研究所客員研究員（2024-）を兼任。専門は演劇研究、舞台芸術アーカイブ研究。主な論文に「太田省吾研究―「述語の演劇」へのプロセス―」（博士学位論文、京都芸術大学、2022）、「劇場のアーカイヴを横断する―京都市内の文化施設を事例に―」（ロームシアター京都リサーチプログラム紀要―2021年度報告書―、2023）他。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館特別展「太田省吾 生成する言葉と沈黙」（2023-2024）の企画・展示構成に従事。

【研究発表会】

赤間　亮（あかま　りょう）
立命館大学文学部　教授、アート・リサーチセンターセンター長
早稲田大学大学院後期課程満期退学。専門は演劇学・文化情報学。早稲田大学演劇博物館助手などを経て、2002年より現職。

新名　佐知子（にいな　さちこ）
秩父宮記念スポーツ博物館　学芸員
九州大大学院博士後期課程満期退学。専門は教育学、博物館学。九州国立博物館研究補佐員などを経て、2012年より現職。2016～2020年度、スポーツ庁のスポーツ・デジタルアーカイブ構想事業委員を務めた。

村上　佳奈子（むらかみ　かなこ）
秩父宮記念スポーツ博物館　学芸員（デジタルアーカイブ担当）
立命館大学大学院文学研究科博士課程前期課程（文化情報学）修了。立命館大学アート・リサーチセンタースタッフを経て、2021年から現職。

収蔵品の利活用に向けた3Dデータ公開
――3D Digital Archive Project

3D data for effective utilization of museum collection

福井　久美子*、小林　愛恵*、瀬賀　未久**
FUKUI Kumiko, KOBAYASHI Manae, SEGA Miku

Resume:
東京都と東京都歴史文化財団が推進するTOKYOスマート・カルチャー・プロジェクトは、2023年より3D Digital Archive Projectを実施している。本稿では、収蔵品の利活用に向けた3Dデータ公開について、江戸東京たてもの園の復元建造物「子宝湯」の事例から、制作過程と今後の展望を報告する。

1. はじめに

東京都と東京都歴史文化財団が推進するTOKYO スマート・カルチャー・プロジェクトは、都立文化施設における情報通信基盤整備、データベース拡充による収蔵品等の利活用、デジタルを活用したプログラムの企画・開発を行っている。

その一環として、東京都が有する収蔵品から高精細な記録データを収集することを目的に、3D Digital Archive Projectを実施している。現在は、東京都立の博物館・美術館収蔵品検索Tokyo Museum Collection（ToMuCo）および3D等を共有するためのプラットフォームSketchfabにて、収蔵品18点の3Dデータを公開している。

東京の歴史をふりかえると、江戸の昔から火災・水害・震災・戦災などにより、多くの貴重な歴史的建造物が失われてきた。現在もまた、社会・経済の変動に伴って、こうした文化遺産が失われつつある[1]。そのなかで、2023年、江戸東京たてもの園は、復元建造物「子宝湯」を後世へ継承するため、幅広い分野での利活用を目指し、3Dデータの制作およびAR(拡張現実)での公開を試みた。

本稿では、収蔵品の利活用に向けた3Dデータ公開について、江戸東京たてもの園の復元建造物「子宝湯」を対象に実施した3D Digital Archive Projectの事例から、制作の過程と今後の展望を報告する。

2. 3Dデータの制作過程

2.1 江戸東京たてもの園「子宝湯」とは

江戸東京たてもの園は、1993年に開園した、現地保存が不可能な歴史的建造物を移築し、復元・保存・展示する野外博物館である。都立小金井公園内に位置し、約7ヘクタールの敷地に30棟の復元建造物が建ち並んでいる。園内の東側にある復元建造物「子宝湯」は、1993年に東京都足立区千住元町から移築した。関東大震災後の東京を中心に流行した、大きな屋根と豪壮な外観、豪華な彫刻など東京型銭湯の特徴を表す建造物である[2]。

建築技術専門員、学芸員とともに、3D化の要望が高く、外観・内観の3Dデータを保存していない「子宝湯」を選定し、3Dデータ化を実施した。

図1　江戸東京たてもの園「子宝湯」外観

2.2 復元建造物3Dデータ活用の企画検討

3Dデータは、オンライン上での公開を行ない、いつでもどこからでも「子宝湯」の詳細見学を可能にするほか、Webアプリケーション「江戸東京たてもの園鑑賞ナビ」や「子宝湯AR」などを通して、スマートフォン端末で手軽に「子宝湯」を可視化できるように計画を策定した。

同時に、復元建造物の維持管理に役立て、経年劣化や災害等発生時の修復・復元に備える用途が満たせるよう、収集するデータの精度を決定した。

*ふくい　くみこ、こばやし　まなえ（東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京）
**せが　みく（株式会社gluon）

2.3 復元建造物の 3D 計測

延べ面積 283.85 ㎡、高さ 9.75mの「子宝湯」は、高精度な 3D 計測をするために、レーザースキャン、フォトグラメトリ、ドローン測量による 3 種の技法を組み合わせて計測を実施した。

レーザースキャンでは、土木や測量の分野で用いられるレーザースキャナ（Leica RTC360）で建物を立体的に記録。正確な寸法の計測と高精度な平面検出を行ない、3 次元空間の座標点を集めた点群データを取得した。

フォトグラメトリは、複数の撮影画像を解析、統合して立体的な 3D モデルを生成する技術である。一眼レフカメラ（SONYα7R）で死角となる場所の撮影、高品質な 3D モデルを生成するために必要な複数の高精細画像を記録した。

ドローン測量では、建物の屋根や上層部を記録するために、ドローン（DJI Mavic3 Enterprise）による写真測量を実施した。建物の上空を飛行しながら、撮影範囲が重なるように連続して写真撮影を行うことで地上の形状を計測した。

2.4 復元建造物の 3D モデル生成

まず、連続的に撮影した大量の写真を整理・選定し、明るさの調整やノイズ軽減などの画像処理を行なった。次に、各写真の特徴的な箇所から位置を推定。レーザースキャンの計測データと合わせて形状を生成し、写真から質感を投影した。ガラスや光沢のある素材、形状が複雑な展示物などは、手作業で修復し、3D モデルを整備した。

建造物内外 100 地点からのレーザースキャン、約 6,000 点に及ぶ撮影画像、広範囲・高位置のドローン測量のデータを組み合わせ、モザイクタイルの目地、木目の凹凸、ペンキ絵の表面の質感までわかる高精細な 3Dモデルを生成した。

図 2　江戸東京たてもの園「子宝湯」3D データ

3. 3D データの公開と今後の展望

復元建造物「子宝湯」の 3D データは、Tokyo Museum Collection での公開に加えて、「子宝湯 AR」（https://museumcollection.tokyo/ar/kodakarayu/）からスマートフォン端末で実空間に「子宝湯」を出現させることができる。2024 年 6 月 26 日からは、3D データを用いたオンライン展覧会「Meta Bath―デジタルで見る子宝湯」を開催予定。

今後も継続して後世へ継承する高精細なデータの収集と保管による、文化財の記録・保存を実施していく。災害等が起きた場合、修復・復元できるよう記録写真や紙の図面と併せて、3D データを保管し、修復時の参考資料として活用する。

また、仮想空間での展覧会など収蔵品の利活用の新たな展開が考えられる。デジタルの特性を活かし、物理的には移動や並列することが難しい収蔵品も、仮想空間上では展示をすることができる。将来的には、複数の都立文化施設の収蔵品を連携させて、Web 上で展覧会を開催し、すべてをアーカイブとして記録することを目指している。

さらに、3D データのオープンデータ化により、多様な領域での収蔵品の活用方法が検討できる。例えば、復元建造物の点群データを公開することで、建築資料として研究に活用され、新たな創作活動の素材として教育への展開が期待できる。

4. おわりに

2024 年 3 月 27 日に江戸東京たてもの園で開催したトークイベントでは、「子宝湯」3D データ化の事例から、デジタル技術を用いて建築物を保存することの意義や可能性について議論された。

そのなかで、江戸東京博物館の藤森照信館長は、実物が持つ力は衰えないことを前提に「建築の世界でも、デジタルと実物とをどのように融合するのかという点に課題と可能性がある」と語った[3]。

3D Digital Archive Project は、収蔵品の記録と保存を目的とする一方で、3D データを用いて、実物では実現することができない鑑賞体験を提供し、収蔵品を後世へ継承することを目指す。

---

[1] 江戸東京たてもの園, https://www.tatemonoen.jp/about/overview.php/,（Accessed 2024-04-22）.
[2] 江戸東京たてもの園『江戸東京たてもの園解説本』東京都歴史文化財団，2003 年.
[3]「建築物のデジタル保存を語る」，『建築通信新聞』（2024 年 4 月 10 日），p.10.

平沢貞通――４つの雅号をもつ画家の矜持

Sadamichi Hirasawa - The pride of a painter with four pennames

矢部　恵子*
YABE, Keiko

Resume:
平沢貞通(1892-1987)は、「不朽」「三味二」「大暲」「光彩」の４つの雅号をもつ画家である。殊に「光彩」は獄中期の雅号であり、作品の多くを個人コレクターが所有している。本発表では、筆者が実施している資料調査をもとに４つの雅号の主な作品を俯瞰的に考察し、画家の再評価・作品存続・アーカイブ化に向けた私見を述べたい。

1. はじめに

筆者は 2014 年より平沢貞通の再評価をめざし研究に着手した。2020、2021 年はコロナ禍の為、個人コレクターの資料調査を見合わせ、2022 年に再開した。

帝銀事件発生（1948 年１月 26 日）後、死刑囚に処され、画家としての功績(帝展無鑑査、「テンペラ画会」会長)を著しく穢された。その惨禍から所蔵者が作品を手放したことによる大量流出、作品から雅号を剥がされる等、作品そのものが「無かった」ように扱われていった。

現存する平沢のパブリックコレクションは平沢の故郷・北海道内に３館と他県に１館の計４館である。

一方、「支援団体」が画材や資料を提供して物心両面から平沢を支えた。平沢は老齢で絵筆を握れなくなる 90 歳迄、精力的に描き続けた。これらの作品点数はパブリックコレクションをはるかに凌ぐ。

2022 年より個人コレクターの資料調査を再開し、これらを雅号別に分類・リスト化をしている。資料調査の中で、以下の事柄が明らかになった。

・パブリックコレクションにおいては画家の最盛期「大暲」時代の作品の評価に留まる。
・個人コレクションを定期的に調査する中で、４つの雅号のうち獄中期「光彩」の在位年数が最も長く、作品数が多く存在する。
　・「不朽」　…17～21 歳（在位 4 年）
　・「三味二」…22～25 歳（在位 3 年）
　・「大暲」　…25～56 歳（在位 31 年）
　・「光彩」　…56～90 歳（在位 34 年）

2. それぞれの雅号と画業

2.1 萌芽期「不朽」

平沢貞通の四つの雅号の由来は、平沢自らが執筆した『雅号を改むるの記』[1]に経緯が綴られている。「中学３年の時　不屈不撓の心境から『不朽』と雅号致しました」との記載がみられる。「不屈不撓」とは、強い意志をもってどんな苦労や困難にもくじけない様を顕わす。画家を志した平沢の一途な心が窺える。大下藤次郎の画塾に学び水彩画家として出発した。「不朽」の雅号で現存する作品は水彩画《風景》１点である。

図１　《風景》、雅号・不朽／個人蔵

2.2 萌芽期「三味二」

1914（大正 3）年、22 歳になった平沢は雅号を「三味二」と改めて、《昆布乾すアイヌ》を第１回二科展に出展し、初入選を果たす。同年、「日本水彩画会小樽支部」を立ち上げ、道内で後進を育成する基盤を整えた。雅号をこの時期に改めたのは、「『不朽』の雅号が「中村不折」の模擬と思われるのを嫌い、本名の「さだみち」から「だ」を抜いて『三味二』と雅号を改めた」との記載が平沢の著作物にみられる。尚、《昆布乾すアイヌ》は現存しない

*やべ　けいこ（京都芸術大学大学院）。

2.3 大成期「大暲」

1917（大正 6）年、平沢は 25 歳で日本画家・横山大観の門を叩いた。平沢に大観を引き合わせたのは、平沢の有力な支援者で東京市会議員を務めていた辰沢延次郎である。その後、師事した横山大観から一字をもらい「平沢大暲」と改号した。1920（大正 9）年、第 2 回帝展に《春近し》を出品し入選。「地平線」を画題にした作品多数。「テンペラ画」会発足、帝展無鑑査となる。

図 2　《春遠からじ》下絵、大暲／個人蔵

2.4 獄中期「光彩」

帝展無鑑査・テンペラ画会会長の権威を奪われ、窓のない独房生活へと転じたが、平沢の無実冤罪を信じる有識者、市井の人々、支援団体等から差し入れられる画材を用いて、その後も精力的に絵筆を握り続けた。

平沢貞通が生涯にわたって描いた画題に、「富士山」と「地平線」が挙げられる。「富士山」は、平沢が獄中でよく描いた画題であるのに対し、逮捕前に描かれた「富士山」は１点のみであった。

左・図 3　《囹圄 1000 作 富士第百景 白雲湧く》
右・図 4　《法隆寺金堂壁画模写絵》／個人蔵

3. まとめ

3.1 ２つの画題「地平線」と「富士山」

「地平線」は ４つの全雅号において作品が存在する画題である。

対する「富士山」は４つの雅号のうち「光彩」の時代における作品が著しく多い。

「不朽」「三味二」の萌芽期に「富士山」の画題は皆無である。「大暲」では採管報国の目的を翻し反戦の意を表す「富士山」を描いて出展するも、当時の評論家から酷評を買っている。

「光彩」では、自己の身の潔白、心情を顕す象徴として大量に「富士山」を描き続けた。

形態も、「額装」「色紙」「未表装」「書簡」「絵葉書」と多様化している。「額装」「色紙」は宅下げされて個人蔵として現存する作品が多くみられる。

3.2 「地平線」と「自然観照」

「自然観照」は、「地平線画家」を自称していた平沢の画家人生における原点である。それは、「よく観て描く」ことへの執心であろう。

萌芽期の平沢が水彩画家・大下藤次郎の画塾への入門を果たし北海道の大自然と対峙してきたのに対し、「光彩」の時代、所謂窓のない獄窓における「自然観照」との違いは何か。

平沢が「観照」の言葉を公式に用いたのは、大成期「大暲」の時代に『中央美術』第 105 号へ寄稿した、「観照より描寫迄」[2]である。観るという行為に対する、画家のより高い意思が寄稿文に顕れていた。

独房・死刑囚という、いつ処刑されるか分からない恐怖と闘う日々の中にありながら観ることの鍛錬で体得した「観得る」力をもって「観照」を繰り返した記憶を頼りに絵筆を握り続けた。その行為こそが、平沢貞通の画家としての矜持であり「生きた証」であろう。

---

1 平沢貞通『雅号を改むるの記』平沢貞通氏を救う会、1978 年
2 平沢貞通「観照より描寫迄」、『中央美術』第 105 号、1924（大正 13）年 8 月、pp. 160-163

おしゃべり源氏物語
――生成AIを用いた博物館ガイドの開発と実運用からの学び

Oshaberi Genji Monogatari: Lessons from the Development and Deployment of a Museum Guide Using Generative AI

矢野　浩二朗*、横山　恵理*
YANO Kojiro, YOKOYAMA Eri

Resume:
筆者らは、生成AIによるガイドアプリ「おしゃべり源氏物語」を開発し、1ヶ月間の美術館展示において運用した。本アプリは音声入力による質問に対しAIが回答し、光源氏の絵が音声に合わせて口を動かすことで、まるで光源氏が回答しているかのような表現を実現した。会期中のアプリ利用回数は3000回を超え、AIとの対話が来館者の能動的な展示鑑賞のきっかけになる可能性が示唆された。

1. はじめに

源氏物語は最も広く知られている古典文学作品の一つであり、書籍、ドラマ、マンガなど様々な形でメディア化され、高校でも学習する機会がある。にも関わらず、20～60歳女性を対象にした調査によると、55.4%が源氏物語を「読んだことがない」、57.4%が源氏物語のあらすじを「あまり/まったくわからない」と回答している[1]。また、源氏物語を「読みたいが読んだことはない」と回答しているグループは、理由として「長い」「どの本を選んだら良いかわからない」「難しい」などを挙げていた。このことからも、源氏物語や関連展示への関心を高めるには、よりわかりやすい教材が必要であると考えられる。

そこで著者らは2023年より、生成AIを活用した一般学習者向けのアプリ「おしえて源氏物語」を開発している。本アプリでは、GPT-4とデータベースを基盤にしたAIに対して、源氏物語の内容や関連情報についての回答を得ることが可能であり、その成果について源氏絵データベース研究会などで報告してきた。それに注目した東京富士美術館の要請により、我々は2024年2月24日から3月24日に開催する「源氏物語　THE TALE OF GENJI ―『源氏文化』の拡がり　絵画、工芸から現代アートまで―」にて、来場者案内用に音声対話、アバターなどを追加したコンテンツ「おしゃべり源氏物語」を展示する運びとなった。

本論文では、「おしゃべり源氏物語」で使用したAI関連技術などについて概説し、実運用を通じて得られた知見と、今後の展望について述べる。

2. 「おしゃべり源氏物語」の構成

「おしゃべり源氏物語」では、音声入力によって質問を入力し、音声認識結果を利用者に確認して問題なければ質問をサーバーに送信し、AIからの回答をテキストおよび音声合成によって提示する。その際、光源氏の絵の口などが合成音声とシンクロして動くことで、光源氏が質問に回答しているかのような表現を実現している。アプリケーション本体はUnityで制作し、光源氏画像部分はEmbodyMe社のReal-time AI video generation SDK（以下EmbodyMe SDK）とVisual Studioで制作した。

音声認識については、Google Cloud Speech-To-Textを始め多くの選択肢があったが、用語を辞書登録しやすいAmivoice(アドバンスト・メディア)を採用した。「おしえて源氏物語」用に制作していた辞書データに展示に関連する用語を追加し、700語を登録した。

入力した質問は、埋め込み(Embedding)と文章検索によってデータベースと照合して必要な情報を抽出し、それをもとにAIが質問に答える。埋め込みについては、東京富士美術館から提供された源氏物語各帖のあらすじをOpenAIのtext-embedding-3-large モデルを用いてベクトル化し、入力された質問をベクトル検索して関連度の高いあらすじを抽出した。しかし、埋め込みだけではキーワードに対する精度の高い検索結果が得にくかったため、Google Vertex Searchを用

*やの　こうじろう、*よこやま　えり（大阪工業大学　情報科学部）。

い、「おしえて源氏物語」用に制作していた源氏物語に関する基礎知識（紫式部の来歴など）、展示説明、和歌、あらすじデータを登録して検索できるようにした。これらの検索結果のテキストを OpenAI gpt-4-turbo-preview モデルの system message として与えて、ユーザーの質問に答えさせている。ユーザーの質問は Google Cloud Firestore に保存し、後で分析出来るようにした。

AI からの回答はストリーミングで取得し、1 文章分の生成結果が得られる毎に Google Text-To-Speech により音声合成し、音声データが得られ次第テキストと音声を提示する。同時に、この音声は EmbodyMe SDK にも与えられる。EmbodyMe SDK は画像（今回は岩佐派「源氏物語図屏風」の光源氏像を使用）を読み込むと自動的に人物部分を処理し、リアルタイムで入力された音声に反応して口などを動かすことができる。ただし、Unity アプリに SDK を組み込むことができなかったため画像提示用の別アプリとして用意し、VB-Audio VoiceMeeter にて Unity アプリからの音声をルーティングすることで対応させた。この際、EmbodyMe SDK と PC の処理能力の問題でコンマ数秒ほどの遅延が生じるため、ルーティングさせる音声とスピーカーに流す音声を別にし、ルーティングさせてからコンマ数秒後に改めてスピーカー用の音声を流すことで、絵と音声がシンクロしているように見せている。

3. 実運用と評価

3.1 展示

「おしゃべり源氏物語」の展示には、ディスプレイとゲームコントローラー、マイク（Logicool YETI）を使用した。会期の前半は SONY の DualSence コントローラーを用いたが、上手くボタンを操作できない高齢の来場者が多かったため、会期後半はボタンが大きく操作しやすい RAZER KITSUNE に差し替え、1 ボタンで操作が完結するようにした。またマイクの高さも、自然に発話出来るようスタンドの高さを調整している。図 1 は修正後の展示の様子である。

会期前半は、上で述べたように質問をそのまま生成 AI に答えさせていたが、誤認識などにより不完全あるいは不要な語句が混じった質問文になることが多かったため、AI が答えやすいように"源氏物語に関する質問の部分を抜き出して整えなさい"という指示を与えて質問文を整形してから回答をリクエストする方法に修正した。

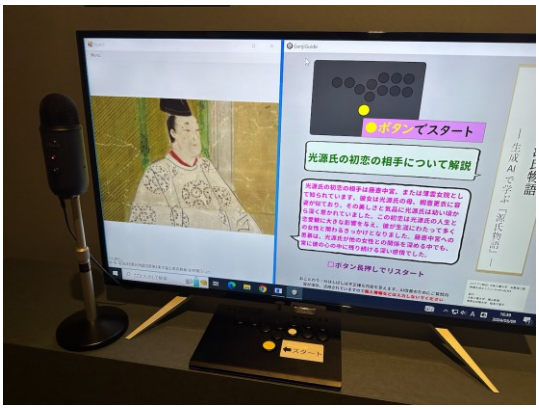

図 1　「おしゃべり源氏物語」の展示

3.2 評価

会期中の来場者数は計 33422 名、アプリの利用回数は計 3097 回であり、特に会期後半はほぼ毎日 120 回以上の利用があった。直接来場者を対象としたアンケート調査は行っていないが、展覧会担当の学芸員である鴨木年泰氏によると、来場者が AI から学んだ内容を他の人に詳しく説明する場面がみられるなど、AI との対話は、来館者が能動的に展示を鑑賞するきっかけになる可能性が示唆されたとのことであった。

4. 展望

今後は、アプリをスマートフォン対応させ、利用者が展示を閲覧しながら質問出来るようにすることを検討しているが、その場合は音声入力からキーボード入力にするなど、UI の修正が必要だろう。また、来場者の多くを占める高齢者に更に配慮したアプリや展示の設計も求められる。今後は、源氏物語以外の作品についても AI アプリを応用していきたい。

[1] 過半数が『源氏物語』を読んだことが「ない」!?『源氏物語』に関するアンケート調査, 学研プラス公式サイト, 2023 年 11 月 30 日, https://gkp-koushiki.gakken.jp/2023/11/30/64636/,　(Accessed 2024-04-13)

民間小劇場におけるアーカイブ構築の意義

The Significance of Building Archives in Private Little Theatres

新里　直之*
NIISATO, Naoyuki

Resume:
舞台芸術アーカイブの動きは日々前進しているが、国内の劇場等文化施設の取り組みについては未詳なところが少なくない。本発表では、全国小劇場ネットワークの参加施設を対象とする概況調査と、先進的なプロジェクト「THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ」の検討を通して、民間小劇場におけるアーカイブ構築とその意義を考察する。

1. はじめに

近年、舞台芸術をめぐるアーカイブ拡充の機運は高まっており、デジタルアーカイブの構築やそれに関連する大規模な事業が実施されている。一方、舞台芸術アーカイブには、劇場、劇団、芸術文化機関等が個別に進めている、上演関係資料の収集・保存・利活用の取り組みがある。

国内の劇場等文化施設のアーカイブ活動を対象とする既往の実態調査は数少なく、コロナ禍以降の動向把握を含む、本格的な調査研究が待たれるところである[1]。このような現状を受けて、本研究では民間小劇場に焦点をあて、アンケート調査と事例検討を試みている。

2. アンケート調査

2.1 全国小劇場ネットワークの調査

本調査は、日本の民間小劇場におけるアーカイブ活動の実態、その概況把握を目的とするものである。調査対象は、国内の民間小劇場をつなぐ組織である、一般社団法人全国小劇場ネットワークに参加する劇場・アトリエ 47 施設である[2]。

2.2 調査方法、調査内容

Web アンケートフォームによる自記式調査法を採用し、以下 12 の設問に対して回答を求めた（選択肢を設定し、あわせて補足すべきことがある場合には自由記述欄での回答を求めた）。

1)各種資料の収集・保管状況に関する設問
・どのような資料種別を収集しているか。
・どこで資料を保管しているか。
・どの程度整理して、資料を保管しているか。
・資料は目録化して管理しているか。

2)映像資料（記録動画）の所蔵状況に関する設問
・所蔵点数。
・磁気テープは含まれているか。
・主な内容は何か。

3)アーカイブ活動の問題意識に関する設問
・運営上のハードル。
・実務上のハードル。
・資料の利活用への関心。
・組織間連携への関心。
・注力している取り組み、今後の計画。

2.3 調査結果

本稿執筆時点は回答を受け付けている最中であるが、すでに多くの施設がリソースの不足に直面しながらも、可能な範囲で上演関係資料等の収集・保管に取り組んでいること。また多くの施設がアーカイブ資料の利活用に関心を持っていることが明らかになっている。集計結果とその分析については発表当日に公開する。

3. 事例検討

3.1 THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ

日本の民間小劇場で上演された舞台芸術作品をシステマティックに記録し、アーカイブを構築する仕組みは、今のところほとんど整備されていない（少なくとも充分に顕在化していない）。小劇場における記録作業については、会場を使用する団体自らが担うケースも少なくない。

そうしたなかで全国小劇場ネットワークの参加劇場の一つである THEATRE E9 KYOTO は、先進的なプロジェクトを立ち上げ、精力的にアーカイブ活動を展開している[3]。

*にいさと　なおゆき（京都芸術大学舞台芸術研究センター）

「THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ」は、2020 年、京都市立芸術大学芸術資源研究センターの研究活動として発足している。THEATRE E9 KYOTO の上演作品を体系的に記録し、それを後世に残すための仕組みづくりを目指している（なお筆者は同プロジェクトに、プロジェクトメンバーとして参加している。）。

図 1　THEATRE E9 KYOTO の外観、場内の様子

3.2 プロジェクトの歩み

「THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ」では、2020 年度、コロナ禍に見舞われながらも記録活動に着手。2021 年度には 10 名ほどのプロジェクトメンバーにより、①上演資料の収集（劇場使用カンパニーに協力を仰ぎ、デジタルデータを収集）、②上演作品の記録（プロジェクトメンバーによる動画撮影）、③月例のオンライン・ミーティング、を行っている。

続く 2022 年度は、映像専門家を交えて撮影方法を再検討し（持続可能かつ安定した動画収集のためのシステムづくり）、2023 年度はシンポジウムを通じてプロジェクトの歩みを振り返り、京都市立芸術大学内の閲覧スペースでのアーカイブ資料の公開に向けて準備を進めている。

4. 組織間連携、持続可能性

アンケート調査と事例検討を、「組織間連携」「持続可能性」という二つのキーワードから顧みておく。

THEATRE E9 KYOTO のプロジェクトは、民間小劇場と公立大学の研究機関との連携によって、実践と理論の両面からアーカイブ構築の方向性を吟味している。こうした組織間の連携・協働のありかたは、多くの民間小劇場が直面している問題、すなわちアーカイブ活動をめぐるリソースの不足を補うものでもある。

他方、このプロジェクトは、将来的に劇場のみで自律的にアーカイブやドキュメンテーションを行い、それを持続することができるようになることを目指している。このようなアーカイブ活動の「基礎体力」への留意は、個別の事情を抱え、即座に専門的なシステム・技術を導入することが難しい他の民間小劇場にとって大いに参考となるものだろう。

5. おわりに

日本の舞台芸術シーンにおいて、民間小劇場は長きにわたり多様な芸術表現と新たな価値創造の発現を支えてきた。また全国小劇場ネットワークは、民間小劇場が地域の文化拠点となることを、ヴィジョンの一つとして掲げている。

以上に鑑みて、民間小劇場におけるアーカイブ構築の意義は、記録の継承によって、新たな芸術創造の糧を生み出し、舞台芸術の新生面を切り拓くこと。さらにはアーカイブを介して、地域の小劇場が担うべき、民間からの公共的活動を活性化することにあると考えられる。

民間小劇場のアーカイブ構築が、劇場文化と地域社会の発展に寄与するであろうポテンシャルについては、引き続き検討を重ねていきたい。

---

[1] なお全国の劇団・劇場等文化施設の収蔵する映像記録に関する既往の調査には、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館によるアンケート調査（2014・2015 年度）がある。『舞台記録映像の保存状況に関するアンケート調査報告書』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館，2017.

[2] 参加劇場・アトリエの数は、2023 年 12 月 14 日現在（閉館・閉館予定の施設を含む）。参加劇場・アトリエの一覧は、以下を参照。全国小劇場ネットワーク, https://shogekijo-network.jp/theaters/,（Accessed 2024-05-12）.

[3] THEATRE E9 KYOTO は、2019 年 6 月、京都市南区（東九条地域）にある倉庫をリノベーションして開設された民間の小劇場である。劇場の管理運営は一般社団法人アーツシード京都。客席数 90 ほどの小劇場は演劇・ダンスを中心にさまざまな表現活動の発表の場となり、また併設されているコワーキングスペースとカフェは自由に人々が集い、交流する場として利用されている。

マルチモーダル型データベースによる複雑化した収蔵品管理情報の統合手法
――秩父宮記念スポーツ博物館を事例に

A Method of Integrating Complex Collection Management Information Using a Multimodal Database:
A Case Study of the Prince Chichibu Memorial Sports Museum

赤間　亮*、村上　佳奈子**、新名　佐知子**
AKAMA Ryo, MURAKAMI Kanako, NIINA Sachiko

Resume:
「スポーツの宮様」として知られた秩父宮雍仁殿下（1902－1953）の御功績を記念して設立された秩父宮スポーツ博物館は、60 年以上の歴史を有する。現在、従来の収蔵品管理方法を継承しつつも、現実的な整理方法を踏まえ、複数系列のデータベースが同時に稼働しているように見えて、利用しながら統一的な情報管理が実現できるマルチモーダル型 DB を使い、新しい体制での管理業務を開始した。本発表では、この手法を紹介し、同様の問題を抱えている機関への参考に供したい。

1. 共同研究前の収蔵品管理データの状況

当館の収蔵品目録は開館時から作成された紙目録が原典で、約 10 年前にエクセルデータ化され、6 万件を超えるデータが存在している。それを基に新規登録を続けてきたものを「マスターデータ」として現用している。しかしながら、以下の課題を抱えていた。

一つ目は、複数の識別子が生じていることである。管理番号は数字の通番が基本になっているが、さまざまな記号や番号が付与され、資料と 1 対 1 のユニークな管理番号が実在していない状態になっている。新博物館の整備を検討している当館は、直近の 10 年間に仮収蔵庫への移転を２回行い、その度に輸送のための一時的な番号が発生した。現在、移転の梱包のまま収蔵庫内で管理し、一時的な番号を継続しているものも多くある。また、悉皆調査のために付与されたもの、ポスター資料や過去の常設展示資料など特定の資料種類や管理状況によって付与したものもある。

二つ目は、資料の収納保管情報が管理番号に表現されておらず、資料のロケーションが瞬時にはわからないことである。ロケーションのための記号や番号を付与し、マスターデータとは別途のエクセルデータを作成している。資料がどの棚のどの箱にあるのかを確認するには、マスターデータと収納保管情報のエクセルを開いて検索する必要があり、非常に煩雑であった。

そこで、令和 3 年度から立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）との共同研究を開始し、当館にふさわしいデータベース（DB）の検討を行ってきた。従来の収蔵品管理データの現状を踏まえつつ、また、再び移転があり、収蔵品管理の大きな変化が想定される当館の事情に対応できる柔軟なシステムを構想する必要があった。そして、今後も持続可能な形でデータベースを運用するために、現場の業務を完全に反映させ、博物館の職員自身がデータベースの持つ思想や機能を理解して運用することを目指したのである。（新名）

2. マルチモーダル型データベースシステム

本研究では、ARC の「文化資源 DB」システムを活用する。これは、“マルチモーダル型 DB”として設計されている。当館の収蔵品を管理するには、この仕組みが最も親和性が高い。マルチモーダル型というのは、一つの DB でありながら、複数の目的を持つ DB が同時に稼働しながら、統一的な動作も可能なように設計されていることを指す。

当館の場合、マスターデータと呼ばれる管理目録と移転等を理由にした物品管理データが存在していた。また、資料群単位でも個別のデータも存在しているが、いずれも完全なものではなく、どれも破棄することができないという状況であった。そのため、バラバラな情報をできる限り、マスターデータに統合したデータを作成し、それをスタートラインとして、新たな収蔵品管理を開始する必要があった。いったん、統合 DB が稼働

*あかま りょう（立命館大学アート・リサーチセンター）。
**むらかみ かなこ、にいな さちこ（秩父宮記念スポーツ博物館）。

すると、一切過去のデータにさかのぼる必要がない状態を目指したのである。

2.1 収蔵品総合データベース

これは、旧データを統合したDBである。統合するために、複数系列存在していた管理番号に対し、統一形式を決めた。当館では、マスターデータの管理番号は、単純なシリアル番号となっていたが、これをフォンド型形式に変更した。書式は、「CM0000-000-000」として、文字列型4区画方式となっている。最初の2文字がフォンドであり、以下の3区画は、「箱」、「ファイル」、「アイテム」を想定している。しかし、元来フォンド型と単アイテム型の混在した管理番号であるため、単純な4区画12文字に収めることができず、例外的な拡張子がそれぞれの区画に付与されることは許可している。

「収蔵品総合DB」では、システム内部で運用される最も重要な「管理番号」、外部に向けても表示される「収蔵品番号」、配架位置を示す「ロケーション番号」があり、後者の2番号は、必要に応じて運用できる。とりわけ当館では、館全体での移転が予定されており、「ロケーション番号」は、重要である。

また、各データ単位に「グループ番号」が指定されるようになっており、初期値として「管理番号」がコピーされるが、いわゆる「シリーズ」に当たるグループを形成し、親、子、孫データの管理ができる。また、状況に応じて、”祖”を設定できる「親タイトル」を持っており、4階層のグループ化が可能となっている。

2.2 収蔵品管理DBと資料群別DB

「収蔵品管理DB」は、所在調査時に撮影された写真をもとに成立させた作業用DBである。まず、ここで現状を反映した管理状況に更新していく必要がある。しかし、実はこのDBも「収蔵品総合DB」と同じDB内で稼働しており〈DBコード〉を変更することで、「収蔵品総合DB」にも表示することができ、いつでも本番データ移行できる。

一方、ポスターについては、基本的にポスターケースに収納され、個別のリストも成立していた。このリストと、マスターデータとが紐づけされている場合もあれば、ポスターリストにのみ存在するデータもあった。つまり、独立したポスター番号しか存在しないものも存在する。そのため、「資料別群DB」を運用して、ポスター専用に閲覧できるようにした。もちろん、これも「総合DB」に吸収されているデータであり、資料群DBを成長させることで、自動的に「総合DB」が成長していくという仕組みである。なお、これを応用すると、「総合DB」にあえて表示していない作業用DBのデータも含めた全データを統合的に検索できる統合検索DBを用意することもできる。（赤間）

3.現在の作業状況

現在、上述の「収蔵品総合DB」と「収蔵品管理用情報DB」を使用し、収蔵品管理業務を行っている。過去の作業データは実情と合致しなくなっているため、課題は、情報の更新と新規登録をこの仕組みで行うことである。

まず「管理情報DB」で箱単位の情報の修正、追加を進めている。登録されている箱単位の画像情報は、過去の調査時の箱ごとの記録画像である。箱には調査や移転の際に概ね何らかの番号が振られており、それらはユニーク番号であるため、それを管理番号として登録されている。しかし、異なる番号体系が乱立している状況であるため、最も簡易な番号体系を採用し、他の番号体系のみで管理されている箱については、新しく番号を付与して以前の番号は旧番号として記録することとした。現在の作業では、番号体系の統一と、各資料箱のロケーション情報の入力をそれぞれ別の担当を立てる形で並行して進めている。どちらの作業においても、収蔵庫内で資料箱を確認し、箱が解体、あるいは同梱されているなどによってデータベースの登録状況から変更がないかを照合しながら、修正、新規登録を行っている。解体、同梱によって実際には現在存在していない箱の情報については、資料の保管履歴が把握できるよう、過去データの共通タグを付与し、削除しない方針とした。また、作業済みのデータにも共通タグを付与しているため、一括編集にも対応できる。

今後の作業としては、箱単位での情報を、画像も含め現状に即した内容に更新し、アイテム単位での情報を精緻化していく予定である。（村上）

【活動紹介】
６月１６日（日）１６：００ -１６：２０

アート・ドキュメンテーション学会の活動に関連の深い機関や団体について、活動の紹介（活動や特徴・機関のニュース・事業紹介等）をしていただくセッションです。

京都国立近代美術館情報資料室について

独立行政法人国立美術館 京都国立近代美術館
（京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1）

https://www.momak.go.jp/

京都国立近代美術館は、1963年に国立近代美術館京都分館として古都京都の地に設置され、その後1967年に京都国立近代美術館として独立、2023年に開館60周年を迎えた。開館当初より、京都の近代美術や、陶芸、染織といった伝統工芸分野を活動の中心におきながらも、絶えずその活動領域を狭めることのない広範で活発な文化事業を行ってきた。

このような館のありかたと呼応するかのように、当館情報資料室でも、国内外の書籍や展覧会図録はもちろんのこと、展覧会資料、作家関連資料、ニューズレター、さらにはダイレクトメールまでもが、美術資料として日々受入収集されている。膨大な資料をいかに整備保管活用すべきかという課題と向き合いながら、情報資料室一同、積極的な情報資料収集整備業務に努めている。

松本　圭子（まつもと　けいこ）
京都国立近代美術館 特定研究員
奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得満期退学。
滋賀県大津市天台宗典編纂所、日本バプテスト連盟医療団日本バプテスト病院図書室、独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館研究補佐員等を経て、現職。

2024 年 5 月「化粧文化ギャラリー」オープン～リアル×デジタルで化粧文化をもっと身近に～

ポーラ文化研究所
（東京都港区南青山 2-5-17
ポーラ青山ビルディング 1F）

ポーラ文化研究所ウェブイト
https://cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/
化粧文化ギャラリー
https://cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/gallery/
デジタルミュージアム
https://cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/digitalmuseum/

ポーラ文化研究所は2024年5月、東京都港区南青山への移転を機に「化粧文化ギャラリー」をオープンした。「美容・化粧・よそおい」の観点から蓄積してきたコレクションと研究知見を【Art＆Books】、2つのエリアで紹介する。Art コーナーでは所蔵品の展示、Books コーナーでは Art の展示テーマから連想を広げた切り口で書架を構成している。開室は週2日だが、木曜日はギャラリートークやワークショップなどの予約制プログラムを実施、金曜は予約不要のフリー開室日としている。また、ギャラリーオープンに先駆けて公開したWebコンテンツ「デジタルミュージアム」では、設立以来企画開催してきた展覧会を再構築し、10企画展、約1,000点のコレクションを公開した。

富澤　洋子（とみざわ　ようこ）
2004年よりポーラ文化研究所にて化粧や美容の歴史や美人観の変遷など、化粧文化研究に携わる。ユニークな活動を広く社会と共有するために「ポーラ化粧文化情報センター」を2005年に開設。ウェブサイト新コンテンツ「デジタルミュージアム」担当。共著『平成美容開花』（ポーラ文化研究所発行）。学芸員・司書。

【活動紹介】

JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG)の活動 ── 2023 年度

JADS Archives and Archival Methods SIG
（学会アーカイブ SIG）

https://sites.google.com/view/jads-aam-sig/

2023年度も、JADSの活動を参照できる「活動年表」と、活動に伴って作成・使用される文書等の資料群を見渡せる「見取り図」の整備をおこなってきました。併せて、各委員会が作成する文書や、これまでに委員会内で引き継がれてきた記録群について、その運用ならびに保管状況を整理することを目的に、ヒアリング調査の準備を進めました。この前段として、会長・幹事長らと、今後の調査方針について打ち合わせを実施しました。また、執行役員会と学会事務局が保管する資料以外にも、JADS の活動を示す資料を会員個人が所有しています。よって、会員個人が所有する学会関連資料の整理作業も試行中です（会員２名について実施）。

JADS Archives and Archival Methods SIG
（学会アーカイブ SIG）
ひと月に一回のペースで、アート・ドキュメンテーション学会における学会アーカイブの在り方等を検討する「会合（参加は JADS 会員限定）」と、広く学協会のアーカイブ等をテーマとして学ぶ「勉強会」を開催しています。
JADS 会員に限らず、どなたでも参加可能な勉強会の開催記録や予定は、SIG のウェブサイトをご覧ください。

【動向紹介】
６月１６日（日）　１６：２０ － １６：５０

JADS の活動に関連の深い、最新技術の動向、法令改正の動向など、会員の皆さまが関心を持っているトピックについて、最新情報を提供するセッションです。
研究発表で取り上げるには、まだ新しすぎるテーマ・話題であっても、将来の方向性や可能性を予見させる場となり、延いては、ここから新たな研究、多様な研究が生まれるきっかけを生むことを期待しています。

AI と著作権の状況整理

井上 奈智（上田女子短期大学 専任講師）

近年、生成AI（Generative Artificial Intelligence）が急速に広まっています。生成 AI は大量の他人の「作品」を学習し、すばやく新たな「作品」を生み出すため、著作権の仕組みととても深く関わります。「AI が著作権を侵害しているのではないか」「AI を使って創作活動を行う際、生成された作品の著作権が誰に帰属するか」「AI が生成した作品が既存の作品と酷似している場合に販売してよいか」といった問題が提起される一方で、AI を用いたモノクロ写真のカラー化の技術が広く紹介されたり、AI を用いた音声ガイドを提供するミュージアムが出現したりするなど、新しい試みも見られます。文化庁が「AI と著作権に関する考え方について」（文化審議会著作権分科会法制度小委員会、2024 年）を公開し、一定の考え方を示した後も、さまざまなセクターで議論が続いています。

動向紹介「AI と著作権の状況整理」では、まだまだ動きがあると思われる AI と著作権について、いったん状況整理してみることを目指します。

井上　奈智（いのうえ　なち）
上田女子短期大学 専任講師（図書館情報学）、修士（法学）。公益社団法人日本図書館協会著作権委員会委員、デジタルアーカイブ学会評議員・法制度部会事務局。国立国会図書館に21年間勤務したのち現職。著作に「著作権法の図書館関係規定の見直しの動向，および授業目的公衆送信補償金制度の図書館への適用について」（図書館雑誌、115号、2021年）等、講演に「超入門はじめてのChatGPT活用講座」（愛荘町図書館の情報学講座、2024年）等がある。

『アート・ドキュメンテーション研究』第 33 号

原稿募集

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第 33 号（2025 年 5 月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。

研究論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、事例報告、資料紹介、書評なども歓迎いたします。詳しくは JADS ウェブサイトの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要（400 字程度）、および原稿種別（投稿規定 3. を参照）を、エントリー期限までに、編集委員会宛にご連絡ください。

エントリーを行いました方には、原稿執筆用のテンプレートをお送りしますので、これに沿ってのご執筆をお願いいたします。

JADS 会員の皆様からの、ふるってのご投稿をお待ちいたしております。

エントリー期限：2024 年 9 月 30 日
原稿提出期限： 2024 年 12 月 15 日
査読・編集：2024 年 12 月～2025 年 5 月

投稿規定・執筆要領の掲載先：http://www.jads.org/pub/pub.html
連絡先：『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会
kenkyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内

Japan Art Documentation Society

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体（情報学・芸術学）に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会（ARLIS/UK & Ireland）の *Art Libraries Journal*(2013, Vol.38, No.2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

・研究会、講演会、見学会の開催

・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG（スペシャル・インタレスト・グループ）を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、JADS Archives and Archival Methods SIG（学会アーカイブSIG）があり、自由に参加できます。

（地区部会・SIG連絡先：
http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig）

・インターネット・ホームページ（日本語版・英語版）の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流

・情報・資料の収集・交換・提供

・アート・ドキュメンテーション関係者の交流

・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行

・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持（上記『研究』並びにHPで提供）

・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持（HPで提供）

・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携

・IFLA（国際図書館連盟）の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力

・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携

・国際会議等参加支援のための助成金の支給

その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。

・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年 3 回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年 1 回)の配付を受けられます（賛助会員は各 2 部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

・正会員　6,000 円　（ただし、65 歳以上は 4,000 円［自己申告制］）

・学生会員　4,000 円 (大学学部、大学院などに在学中の学生.申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)

・賛助会員（個人または機関・団体）一口以上
（一口　30,000 円）

・団体購読会員 12,000 円

■ホームページ

・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。
http://www.jads.org/

■入会方法

・HP から「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の問合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。
(入会申込書ダウンロード：
http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html)

Art Libraries Journal (2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル（株）毎日学術フォーラム内

Tel：03-6267-4550　　Fax：03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2024 年 6 月 1 日現在

JADS

アート・ドキュメンテーション学会
第 35 回（2024 年度）年次大会　予稿集
発行日: 2024 年 6 月 15 日（土）
編集: アート・ドキュメンテーション学会

発行: アート・ドキュメンテーション学会
http://www.jads.org/